

関係各位

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：JA 福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)
(公 印 省 略)

営農情報 16

麦類の中間管理技術対策について

今年の麦は、播種時期の違いによって生育差が大きくなっている。11月中下旬播きは少雨で経過したため、播種作業は順調に進み、適度な土壤水分であったことから出芽・苗立ちは良好である。一方、11月末以降播きは、11月23日から約1か月間降雨がなかったため、土壤の乾燥によって出芽が遅れている。さらに、12月～1月上旬の平均気温が1.3℃低く経過したため、生育は遅くなっている。

向こう1か月の季節予報（福岡管区气象台発表、1月16日～2月15日の天候見通し）では、平年に比べて気温が高く、平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いと予想されている。そこで、麦の収量安定のため、下記のような技術対策を実施する。

技術対策

(1) 排水対策

ほ場の湿潤状態が続いており、排水対策が重要である。ほ場に水が溜まらないよう排水溝の溝さらえを行い、排水口を整備して地表水を排水する。ほ場が乾燥した時点で、土入れを兼ねて作溝する。

(2) 土入れ・踏圧

土壤が乾燥した時点で、速やかに土入れ・踏圧を実施する。

踏圧は、倒伏防止、早期茎立ち抑制のため、節間伸長開始期前（踏圧の晩限：草丈20～25cm程度）までに3～4回実施する。

土入れは、倒伏防止や雑草防除の効果が高いため、3月上旬までに2～3回実施する。

(3) 雑草防除

雑草の発生量が多い。雑草の草種や発生状況を観察し、選択制茎葉処理除草剤を適期に処理する。除草剤は普通作雑草防除の手引きを参照し、最新の登録情報を確認して使用する。

(4) 追肥

1回目の追肥（分けつ肥）は、小麦・食料用大麦・裸麦では1月下旬に基準量を施用し、ビール大麦は1月下旬～2月中旬に基準量を施用する。追肥に緩効性肥料を用いる場合も1月下旬に施用するが、施肥後に土入れを実施して確実に覆土を行う。

2回目の追肥（穂肥）は、食料用大麦・裸麦では2月下旬、小麦では3月上旬に基準量を施用する。なお、葉色が低下した場合は、2回目の追肥を早める。



落水口

図 溝と排水口をつなぎ、地表水を排水

以上